

ライフ
ストーリー

藤井 航さん

(2013年3月神学部卒業)

自分にしかない生き方

1. キリスト教を学ぶために

僕は関西学院大学の神学部に入学をしましたが、そこに至るまでの道では色々な事がありました。自分の性別で悩んでいた中高生時代を思い返すと、大学進学やその後の将来に対して希望など一つもなかったと思います。“これからどう生きていくのか”、クラスメイトが話している夢や将来の話は、自分にとって現実味のない話でしかなく、何をしたいかなど決められる段階にはなかったと思います。ですが、その状態でも時間は流れていて進路を決めていかなければなりません。その中で僕は、小さい頃からヘアスタイルなどに興味があり、密かに美容師ひそになりたいという思いがありました。その理由としては性別に関係なく「腕さえあれば」働くことができると思ったからです。中性的な人がいても問われない、そこなら生きていけるかも、とっていました。

その時に転機が訪れます。高校3年の8月、受験で忙しいであろう時期にずっと誘われていたバングラデシュのスタディツアーへの参加が、高校卒業後の進路選択、そして僕の人生に大きな影響を与えることになりました。約1ヶ月の滞在で、都心部と田舎に行く予定でした。目にするもの全てが刺激的で、貧困格差、生活水準などバングラデシュという国を知り、体験する事ができました。

その体験の中で一番感じたのは“宗教観”の違いでした。バングラデシュではイスラム教徒が9割を占めており、キリスト教徒は全体の1%くらいしかいないのですが、それぞれの宗教が「共存」して生きている場面とたくさん出合いました。僕は幼少期から教会で育ち、受洗もしています。日本でもキリスト教徒の人口は少ないですが、宗教の捉え方が大きく違いました。バングラデシュは名前の次に、「あなたの宗教は何？」と尋ねるくらい、信仰するものがあることが大前提という国でした。こうした体験から、キリスト教や宗教についてまだまだ知らないことがたくさんあると感じ、自分にとっての「キリスト教」とはなにかを学びたいと思うようになりました。最終的に関学の神学部へ進学するという選択肢が浮かび上がり、様々な人の支えもありながら無事に関西学院大学に合格し、入学しま

した。

2. 入学直後の壁

希望の関学に入学できたのですが、入学式でいきなり葛藤に直面しました。それは入学式の服装のことでした。僕はメンズスーツで入学式を迎えなかったのですが、当時はまだそこまで主張できる勇気もなく、同行してくれた母親にも申し訳ないと思ってメンズスーツという選択肢は諦め、メンズスーツに限りなく近いレディースのパンツスーツを着ることにしました。レディースのスーツということに加えて、初めて履くヒールやストッキングの不快感もあり、ふてくされた顔で入学式に向かったことを覚えています。服装は女性的、髪型は男性的という「アンバランスな自分」に対する葛藤、そしてその自分を周囲の人がどう思っているのだろうというストレスを抱え、初日を終えた瞬間すぐに帰宅して「一生履くものか！」とヒールを投げ捨てました。

「第1番目の壁」である入学式を終えたものの、2日目には別の壁が待っていました。神学部では、新入生全員で行う1泊のオリエンテーションがあります。またその日の昼休みには男女で分かれてご飯を食べるプログラムがありました。僕の身なりは男性的でよく見ると女性に見えるかもしれない中途半端な状態です。ここで女性の班に入る事はとてもストレスでした。ですが名簿には女性で載っているのに、女性のところに行かざるを得ません。名を呼ばれて列の後ろ側にゆっくり近づき、立っていると先輩に男の子に間違われ、全員の前で性別を明かさなければならず、本当に気まずい思いをしました。1泊の部屋割りも女性部屋、お風呂は大浴場と僕にとってはハードルが高い事だらけで、入学してすぐに心が折れそうだった事を思い出します。

今現在もこうした行事が行われているかはわかりませんが、大学に入っても男女別にならざるを得ない場面や、多様な背景を持つ人々への配慮に欠ける場面は溢れています。そういった壁に直面する可能性は大にあると思います。

3. 恩師・同期との出会い、環境の変化

入学式、オリエンテーションと壁にぶち当たり、授業が始まってからはボーイッシュな女子を演じる、まさに高校時代の延長で過ごしていました。学生生活をどう送るのか、将来どうするのか、そんな見通しを考えることすらままならなかった入学直後、僕は恩師と出会います。故榎本てる子先生（当時神学部准教授）との運命的な出会いがあり、そこから人生の風向きが変わっていきます。

榎本先生は僕のセクシュアリティには一切触れず、ただ授業内外で色々な人と出会わせてくれました。レズビアンの方、ゲイの方、トランスジェンダーの方、その他様々な人と。いずれも僕にとっては初めての出会いで、こんなにも同じような境遇の人がいるのかと気持ちが自然と楽になりました。おそらくこの頃から榎本先生は僕の悩みに気付いていたのかもしれませんが、自然にカミングアウトしようと思えるような状況へ導かれました。「先生、今更なんだけど、実は自分の事を性同一性障害だと思っていて、ずっと女だと思えなくて、男になりたいと思っている」と告げると、先生は黙ってしっかりと話を聞き、不安を抱えて生きている僕を優しい雰囲気の中で受け止め、そして「これから、どうしていきたいんや？」と聞いてくださいました。

そのような出来事から僕の学生生活はどんどん変化していきました。榎本先生に相談しながら、今後の性別変更へ向けた動きや、友達へのカミングアウトなどが進んでいく事になりました。まず、一番言いたいと思っていた女友だちに初めてカミングアウトをしました。その友だちは下宿生で互いの家に泊まったりして仲良くなった子でした。自分の気持ちを話すとまず第一声に「いいじゃん！」と言われました。そして「色々大変だったんだね」と話を聞いてくれました。ありのままの自分を受け止めてくれた友達に本当に感謝しています。他の友達にも話したいと伝えると、一緒に考えようと言ってくれました。それからは他の子に話すタイミング、順番、場所などを念入りに考えてから伝えていきました。気がつけば、いつも一緒にいてくれるメンバーはみんな「僕」を知っていて、“男性”とし

て扱ってくれるようになりました。

他の教授に対しては、榎本先生が間に入り、教授会で話をしてくれました。その後から授業で僕を呼ぶ時は「藤井さん」ではなく「藤井くん」となり、本当に嬉しかったのを覚えています。2回生になった時には正式に学生証も通称名へと変更する事が認められました。その当時では学内で2例目だったと聞いています。1例目となってくれた方のおかげで僕は順調に名を変える事ができました。気がつくまで僕の学生生活の中で、どんどん自分らしく生活できる時間が増えていきました。

そんなある日、神学部事務室の職員の方から呼び出されました。怒られるかもしれないと思っていた僕は会議室に通され、聞かれたのは「あなたのセクシュアリティの事を聞いたけれど、現時点で学内の生活で困っていることはない？」ということでした。もともと事務室へ榎本先生が伝えてくださっている事は知っていたけれど、このように聞いてくださるとは思ってもみないことでした。具体的に変更して下さったのは、健康診断の場所と、トレーニングセンターのロッカーの鍵の件でした。健康診断は一度だけ体験しましたが、僕には耐え難いものでした。呼び出し以降は保健館にて単独で受ける事が認められ、大分ストレスが減りました。トレーニングセンターでは入室すると、男女で色分けした鍵をもらいます。はじめからロッカーを使わなくていいよう工夫はしていたので一度も使用したことはなかったのですが、女性用の鍵をもらう事がとても辛かったです。なので、ロッカーは使用しないけれど鍵だけ男性用に替えてもらう事ができ、それだけでも気持ちが楽になったのを覚えています。

4. 性別変更への道

こうした環境の変化に沿うかのように、自分らしく生きるため、身体を男性寄りに近づけていく治療を開始しました。親へのカミングアウトなど、まだたくさん壁はありましたが、多くの人に支えられて学生生活を送りつつ、まずはホルモン治療からスタートしました。20歳になった夏からスタートし、月2回のホルモン注射を打っていくと徐々に身体が男性化して

いきました。声変わり、からだつき、体調の変化があり、副作用としては更年期障害のようなものもありました。神経過敏になり、日常を過ごす上で身体的なしんどさを感じながらの生活はとても負担が大きかったです。しかしそのような中、周りの支えもあり、ついに性別適合手術を受けられることになりました。4回生の2月にタイにて、2週間の滞在で手術を受けました。

法律上、性別変更するためには性別適合手術を受けなければなりません。卒業するまでに変更する事を目標にしていた中で、手術ができた事は僕にとって、非常に大きな事でした。ですがやはり、手術を受ける前は正直とても不安でした。どうなってしまうのか。初めての手術が異国の地で、無事に終わられるのか。手術の直前は今までの人生が走馬灯のように頭の中を巡りました。ただその反面、やっとここまでこれたという気持ちと、この先どうだろうと、もう神様に自分を委ねるしかない、信じようと覚悟しました。今でもその時の気持ちを忘れられません。無事に手術も終わり、僕は大きな壁を乗り越えました。そして大学の仲間、先生方、家族の支えがあり、“男性”に性別変更をする事ができました。

5. 就職活動「遠いスタートライン」

就職活動に関しては、みんなと同じく3回生の終わり頃から、始めました。3回生ですのでまだ手術はしていませんし、身体的には男性化した女性の体のままでした。ただ、男性での就職を目指していたのでメンズスーツを着て友だちと一緒に合同説明会にも行きました。周囲と足並みを揃えて参加しつつも、やっぱりどこか実感が湧かず、「本当に受けられるのかな、どうしよう」という思いでした。中高生時代から、周りと同じように就職活動ができるのかどうか分からないという不安を常に感じていました。就職以外の選択肢も念頭に置いていましたが、一回はちゃんと就職活動の波に乗ってみようと思い、実家がある関東での就職を目的とした就職活動を始めました。

3回生の冬ごろ、車好きということ、かつ営業職を希望していたことも

あって、某販売会社の説明会に参加しました。その会社では説明会の後にエントリーシートを提出するという流れで、その際に健康診断書の提出が条件になっていました。僕は「まだ戸籍上女だから提出できない、どうしよう」と不安になりました。色々な選択肢はあったかもしれませんが、これはちゃんと話さなくてはと思い、説明会で人事担当者に時間をもらいカミングアウトする事に決めました。「すみません、申し訳ないのですけれど10分ぐらいで良いので時間を頂けますか」と担当者に言うと、「良いですよ」と言ってくださり2人っきりで話をしました。「実は…」と自分の現状を説明し、健康診断書はまだ女性だという事を伝えました。また4月までに性別移行すると決めている旨も伝えました。なので僕はエントリーできる前提で、「エントリー後に提出させていただけますか」と聞きました。

話を聞いてくださった人事担当者は「私自身全く偏見はありません」と寛容な態度をとってくれましたが、曇った顔で「でも、会社としては…」と言われ、10分程度待たされた後に営業部長がやってきました。すると突然「申し訳ございません」と謝ってきました。率直に僕は「…何で?」と思っていると、謝った割にはとてもきつい事を言われました。「会社として体制がない」「もし、入社して周りの人が、そういう…笑いとかで話題が出たときにあなたは耐えられますか」という話や、「取引先の人にそれが分かったときに、会社としてどうやって対応したら良いか分からない」とか、「お客さんにそれが分かったときに、どうするんですか」など。最後に言われたのが「あなたの戸籍が男性なら問題ないのですが」ということでした。結局は戸籍が書いてある紙一枚で、進路がこんなにも縛られてしまう事に僕は直面しました。そしてそこで初めて「あっ、俺、エントリーできないんだ」と気がつきました。あの一緒に説明会に出ていた人たちとはきっと同じ気持ちで説明会に参加したのに。一生懸命自己アピールも考え頑張ろうと思っていたのに。戸籍が違う事、性別に違和がある事、それが理由で、僕は同じスタートラインにすらも立てていなかった。「これが社会か…現実か」と知りました。「他の人と同じスタートラインに立つことすら許されない」という重い現実。説明会からの帰り道、僕は榎本先生

に電話で事の顛末^{てんまつ}を告げると、「そうかあ、しんどいな。早よ帰ってき！」と声をかけてくださいました。その声を聞いてやっと涙がこみ上げてきて、本当に本当に悔しかったです。

この出来事の後、父親に相談すると、全部電話であらかじめ会社側の判断を聞く事を提案され、それからは電話でまずカミングアウトする事にしました。約10社に電話をかけてみると、様々な返答が返ってきました。まず「その場では答えられない」と切られるパターン、「今、私じゃ答えられないから後ほど上司から電話させます」と言われ返信の電話がないパターン、本当に電話がかかってきて「体制がありません」とか「申し訳ないけれども、こちらでは選考基準にはないので」というパターン。どこも僕のようなセクシュアルマイノリティに関して選考対象としていないようでした。印象としては「それはなに？」というような“無知”な会社が多かったように思います。

ただ最後にかけた1社は違う返答でした。同じように聞いてみると「私たちは性別では判断していません」と言われ、「弊社に興味があるのでしたら、説明会にお越しください」と言われました。初めての返答だったので「よし、行ってみよう」と思い東京へと向かいました。ようやくスタートラインに立つことができる会社を見つけて、説明会に赴くことができたのです。

説明会の後にいざエントリーをしようとしたところで、担当者から「30分ぐらい時間を貰えますか？」と声をかけられました。「大丈夫です」と答えたものの、前回の経験から「やっぱりダメって言われるのかな」といった不安を感じていました。すると担当者は「電話でお話してもらったことなのだけれど、それってどういうことなの？」「僕ちょっとよく分からないけど、それって病気なの？」といった素朴な質問をされました。その質問を皮切りに、それらの質問に対して、またセクシュアリティ全般についての説明から自身の状況に至るまでの話をしていくことになったのです。

セクシュアルマイノリティや性同一性障害を説明したうえで、「今、僕は性同一性障害の診断書を持っていて、男性になるためのホルモン注射を打ったりしています。これから手術をして戸籍を男性に変えようと動いて

います」という話をすると、「でも、性同一性障害っていう言葉って、障害ってついているじゃないですか」と返されました。それがすごく気になったらしく、続いて「でも、性同一性障害というけど、それは病気じゃないし障害じゃないんだよね。でも、それを性同一性障害って言ってしまっただけなの？ だってみんなと変わらないでしょ？」と言われてました。少し返答を考えていると「エントリーするんだよね？」と言われて、「したいです」と答えると、「ならそのときにこの子は性同一性障害でって言っても大丈夫？」って言われました。そこで、「僕は病気ではないけれども、今、この世間では恐らく性同一性障害っていう言葉が一番知られているので、そういう意味では性同一性障害と伝えていただいたほうが社長にも分かっていたりもするかもしれません。けれども、一応トランスジェンダーという言葉もあるので、二つ伝えてもらえますか」と伝えました。すると深くうなずいて「分かりました。では、書類選考を行い結果は連絡します」と言われ、無事に人生で初めてエントリーする事が出来ました。その後は、書類選考から1次審査、2次審査と気がつけば最終面接まで順調に進み、なんと無事に内定を取ることができました。まさか内定をもらえるとは思っていませんでしたので本当に驚きました。とても嬉しかったのを覚えています。ですが、本当に就職の道へいくのかは相当悩みました。なぜなら色々不安な事も多い中で男性社員として働く事ができるのか、全くの未知の世界だったからです。

そのように悩んでいる時に1か月ほど、セクシュアリティとキリスト教についての調査や勉強をしにハワイへ行きました。就職するか、もしくは勉強を深めていくか。僕はそこで様々なセクシュアリティで生きている人たちと出会う事で、たくさん事を教わりました。それぞれが自分の道を生きている、その事を強く感じました。そして今自分の前には実際に男性として働く事ができるチャンスを与えられたのだと気がきました。働いてみないと語れないこと、経験してみないと分からないことがある。神様が自分を受け入れてくれる会社と出合わせてくれたのであれば、僕はそっちに進んでまず男性として社会で生きてみようと思ひ、就職する道を選びました。

6. 男性として送る社会人生活…「女性であった人生含めて自分という気づき」

2013年3月、僕は無事に関西学院大学を卒業しました。そして、入学式とは違い、ストッキングを履くこともなく、新調したメンズスーツ・ビジネスシューズという、望んでいた服装で卒業式を迎えることができました。この4年間で得たものは僕が思いもしなかったものばかりで、出会いや経験のすべてが僕の原点となっています。仲間との別れを惜しみつつ、晴れやかな気持ちで卒業した後は、関東の実家に戻り、東京の会社へ男性として入社しました。

そこでは何もかもが新しいことばかりでした。出会った同期も「ふじいわたる」を男としてしか認識していない環境、男であることが前提の生活、みんな自分が女であったことを知らない中で生きていく事はすごく新鮮な事でした。初めは「うん、これだ!」という思いがありましたが、どんどんしんどくなっていきました。それは入社した事を後悔しているというわけではなく、ただ自分の体がまだ完全に男性ではないという事、自分が身体的に女性で生まれたという事がバレてはいけない、誰かが気付いているかもしれないなど、そういうことがずっとついてまわる生活が始まったからです。つまり、これまでのカミングアウトをして男性として送る学生生活とは全く異なった環境や人間関係の中で生きていくことで、新たな壁に直面していくことになったのです。

さらに、予期していなかった出来事として、アウトティング（本人の同意なく、公にされていないセクシュアリティを第三者に暴露する行為）も経験しました。入社後に人事担当者から「幹部クラスにはもう言うてある」と知らされたのです。僕自身、セクシュアリティについて話すこと自体は問題ではないと考えていたのですが、新入社員であるがゆえに「幹部クラス」が誰を指すのかも分からない状態で、相談などは一切なく勝手に話され、事後報告でその事実を知らされたことで「誰が知ってるのだろう」とビクビクしながら働かなければならなくなってしまったのです。

入社1年目は社会人としてのマナーから、仕事内容まで覚えることもた

くさんあるため、多くの人が大変な思いをします。僕はそれに加えて、性別のことで常に仕事とは別のストレスやプレッシャーも経験し、ぐちゃぐちゃの毎日を送るはめになりました。これは全く想像もしていない生活でした。

あるとき、職場のフロア長のような人がパーッと寄ってきて「君だよ、元々女だったって子？」と言われました。「ええ!？」と心の中では大パニック状態でしたが、同時に「この人が知っているのか」と急に怖さがリアルになりました。とっさに「あっ、はい」と答えると、「へえー」と言われ、「でもね、ここ小さい会社だから、全員知っているって思っておいたほうが良いよ」と、ポンと言われました。それを言われてからもう本当に毎日が怖く、きっと僕が思っている以上に僕が身体的に女性で生まれた事を周りの人は知っていたのかもしれない。

そんな恐怖感と常に隣り合わせで何とか3年間働き続け、僕は新たな心境へとたどり着きました。それは、「男性として埋没して生きていくことは自分らしい生き方ではない」ということです。周りから見ると恐らく90%ぐらいの人から男性と認識され、それが自分にとってナチュラルな状態ではもちろんありました。けれど初めて“男性”社会に入ったことで「女性であった人生含めて、全てが自分」という事をすごく大切に思うようになりました。“女性”と認識されていた時代も含め、それを大切にしていきたいと思うからこそ、隠すことじゃないと思うようになりました。

もちろんすぐにオープンで生きられるわけではありません。トランスジェンダーであることを明かさずに男性として生きるのではなく、これまで女性として生きてきた過去とともに、男性として生きていきたいという考えに至ったのです。

ちょうどその時、僕は働いていた会社を辞めることを決意しました。辞める際に、僕は店長に自分の性別のことや、日常的に当たり前のように行われるステレオタイプの男女分けなどがしんどかったことを、意を決して告げる事ができました。会社からしたら特にそのような視点ではなく、会社のために商品を売る事が目的であり、社員は利益を出し、結果を出せた社員は評価される、そのような構造の中にいたので、そういう意味では、

店長は「別に全然そんなのは気にしたことなかった」との事でした。でもその後「でも、やっぱりしんどいこととかあったんだな」と言ってくださいました。僕もその言葉を受け、少し今までのことを思い返しながら「本当にありがとうございました」と伝えると、「藤井らしく生きていけよ」と言葉をかけてくださいました。

自分にとってはありのままを受け止めてくれた会社でもあり、社会の中で生きていく事を思い知らせてくれた会社でもあり、本当の自分の生き方に気づく時間をくれた会社でした。ただやはり会社にはそれぞれの方針があって、従業員を守る、働く会社員を守る、というのも大切な事だと思います。

人権についてどこまで考えているかは会社によってまちまちです。その部分で僕がいた会社は、人権というよりは、ある意味利益を上げる、収益を上げる、本来の会社の理念に沿ってやっていただけというような印象が強く、今思い返してもそういう会社だったなと思います。ただ、ごく当たり前のように僕をエントリーさせてくれて、そして採ってくれたことに対しては、心から感謝しています。入社したことに後悔は一切なく、とても楽しかったです。しんどかったけれども、選択して良かったなと思える道でした。そして、その会社での3年間を経て、僕はもう一度、関西へと戻ることになりました。

7. 誰もが居心地の良い職場を目指して

現在、僕は様々な繋がりからキリスト教社会福祉施設に勤めています。職場では、完全に埋没しているわけではなく、自分から話した人は知っている状態です。また、現在は職場の内外で、セクシュアリティ関係のイベントの企画運営や啓発、講演なども行っています。ただ、前職でぶつかった壁が今の職場にはないのかというと、そんなことはなく、やっぱり職場の中で自分をどう表現して生きていこうかということについては、ずっと考え続けています。

こうした葛藤を象徴する出来事がありました。僕が働く法人内の別施設

での職員研修の講演です。この研修では、僕自身のセクシュアリティや働く中で抱き続けてきた葛藤について、100人ほどの職員に向けて話をすることを依頼されました。職場とは全く関係のない場所でした。講演会を行っていませんでしたので、この依頼は僕にとって慎重に考えざるを得ない一件でした。

この講演に限らず、講演会では必然的に不特定多数の人たちにカミングアウトする事になります。もちろんそれを理解した上でお話ししていますし、あらゆる可能性を踏まえた上で行っています。ただ僕の場合、職場に戻ってきたらおおよそクローズになるしかない、というようなある意味二重生活を送っていました。それは“職場”という自分の居場所に対し、完全にオープンとする事にまだ恐れがあるということです。でも本音としては、自分自身を明かして生きていきたい部分もありますし、「これが自分なんです」と言える環境を作っていきたいと思う中で、別に隠しているわけじゃないのだからビクビクするのも何か違う、と思っている自分もいました。つまり、自分の中に大きな矛盾した状態があり、常にその矛盾と戦いながら自分らしい生き方とはどうしたらできるのか、とずっと考えていました。

そういう自分に気がついた時、僕は選択しないといけない状況にいました。この依頼を引き受けるか、お断りするか。結果として僕は大きな挑戦をする事を選びました。なぜなら色々な事に惑わされたり、縛られたりせず、単純に自分でいたいと感じたからです。そして何よりも周りにその自分と向き合い、関わり、相談のしてくれる人の存在があった事を改めて知る事が出来ました。自分一人では決して出来ない事でした。実際に話した時には、本当に震えが止まらなくて、怖くなかったといえば嘘になります。でも、気持ちとしてはとてもスッキリというか、新たなスタートを迎えたような気持ちでした。

今でも職場では僕のことを知らない人もいます。その中で、自分にとっての、また他の人にとっての“安全な場所”とはどういうところなのか、しっかり考えていきたいです。また他の当事者がどのように過ごしているのかなど気持ちをシェアしたいという思いもあります。今後も自分の体験

を通し、それぞれが自分らしく生きられる社会を、職場を目指し、活動していきたくと思っています。

8. おわりに「自分にしかない生き方～継ないでいく事～」

僕は今でも、“トランスジェンダー FtM（女性から男性へ）”であることで悩む事がたくさんあります。本当に想定できないような壁が急に立ちほだかったり、一筋縄でいかない事もたくさんあります。「なぜ男の身体で生まれなかったのか」という葛藤はおそらく死ぬまで続くでしょう。どんなに生活が、環境が変わっても、僕が歩んできた道で起きた事は変わる事はありません。今でも、過去に経験した痛みや苦しさは完全には癒えていないかもしれません。ただ同時に、それを他人と比べるものでもないとも思います。それぞれが感じてきた痛みはその人にしかわからないものであると思うからです。だからこそ僕は、その人にしか歩めない道があって、自分にしか生きられない人生があるのではないかと思えるようになりました。それは間違いなく、僕の手を握り返してくれた人たちの存在がそう思わせてくれたと思っています。関西学院大学に入ったとき、僕は今のような人生を送るなど微塵^{みじん}も思っていませんでした。ですが、学生生活の中でふれた“自分らしく生きていい、性は自分で表現するもの”という体験、応援してくれた仲間や友人、守ってくれた家族、導いてくれた恩師の存在が僕の土台、礎となっています。誰かに自分の事を伝える事は怖い事です。それはセクシュアリティに限らず、どんな事でも当てはまります。でももし自分らしく生きていきたい、自分自身を知って欲しいと思う時があるならば、きっと必ず周りに手を握ってくれる存在がいるという事を僕はこれからも信じ続けます。そしてまだまだこれから待ち受ける楽しい事もしんどい事も含め、『自分にしかない生き方』を探しながら、今度は僕が誰かの手を握れる事を目標に、生きていきたくと思います。